

小国636
学図

文部省検定済教科書
財団法人教育図書研究会編修

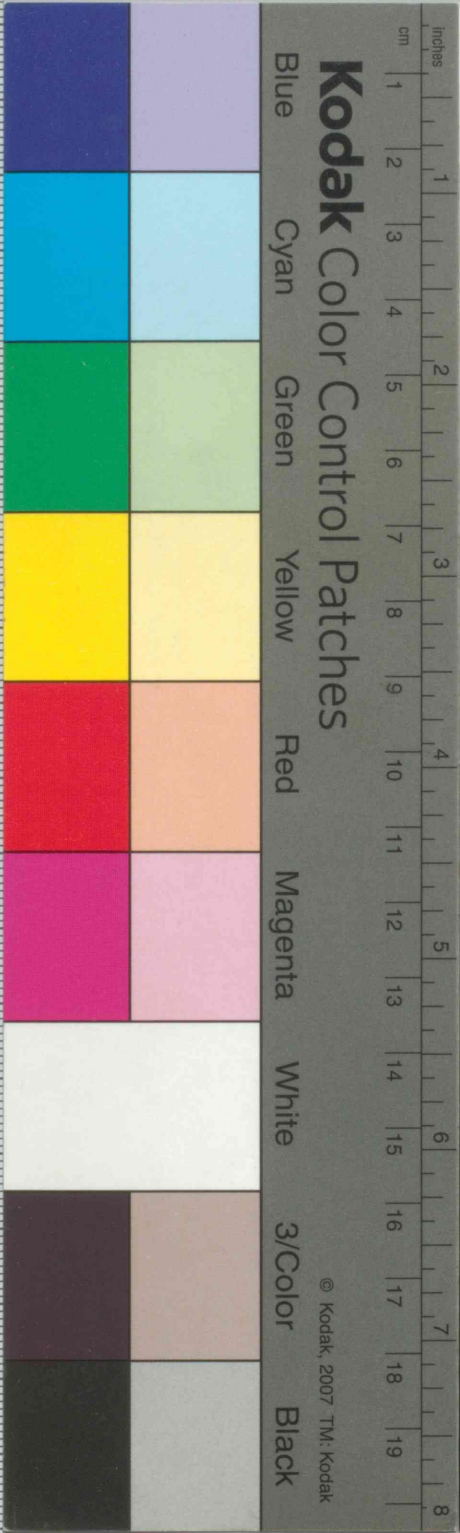
六年生の 国語 中



学校図書株式会社発行

KC
G16

教科
34
013



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60324

教科書文庫

6
810
34-1950
01304
49750



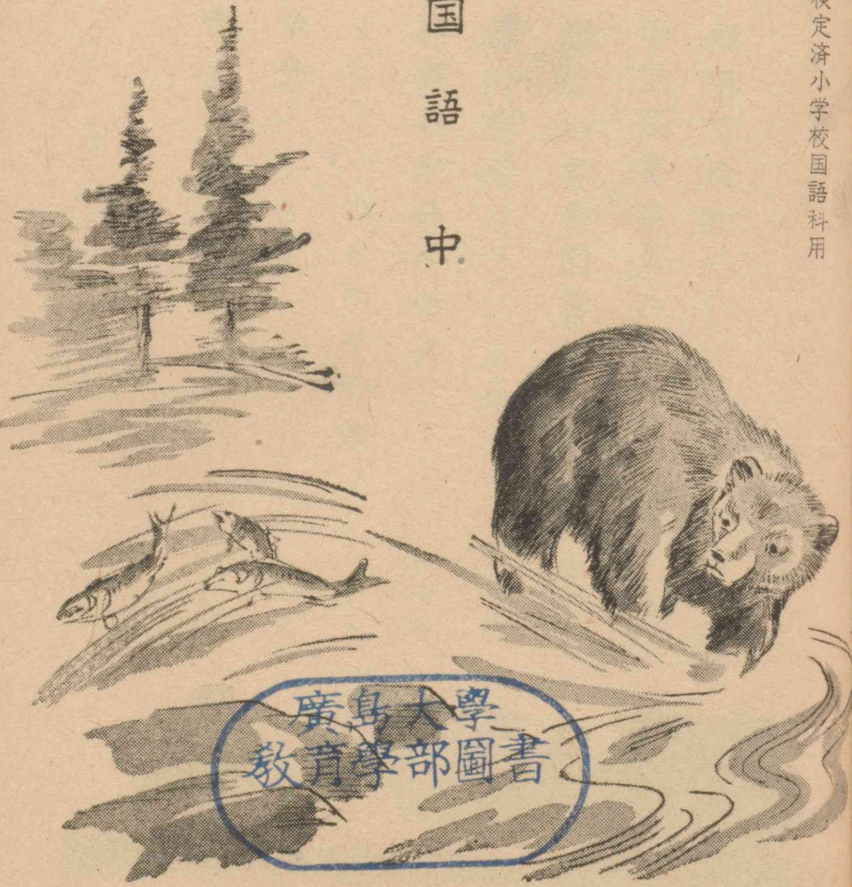
寄 贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449750

昭和二十五年 月 日 文部省検定済小学校国語科用

六年生の国語中

広島大学図書
0130449750

広島大学
教育学部図書

学校図書株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449750





もくろく

一 芸術をうむ心……………四

雪舟……………四

シューベルトの子守歌……………十二

・ 詩歌の味わいかた……………二十二

二 読書の秋……………三十六

新しい学校図書館……………三十六

学校図書委員の仕事……………三十九

読書クラブ……………四十二

三 いわおの巨人……………四十四

三 エンジンのひびき……………五十八

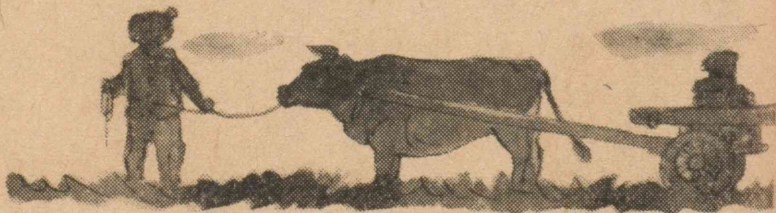
歯車の話……………五十八

北極探検のアムンゼン……………七十三

飛行船での再挙……………七十九

ことばの表……………九十八

漢字の表……………百四



一 芸術をうむ心

雪舟 せつしゆう



日本には、むかしからすぐれた画家がたくさんいるが、中でも特にすぐれた人といえ、だれでも雪舟をそのうちのひとりに数えるであろう。

「雪舟がなぜこのようにすぐれた画家になったか。」
この研究は、ひとり画家と

しての研究ばかりでなく、他の方面の研究をする者にも、大いに教えられるものがあると思う。

雪舟は今の岡山県に生まれた。時は、足利四代將軍義持の世で、当時の明（今の中国）との交通のさかんな時であった。足利義持は、あのはでやかなことをこのむ三代將軍義満のあとをついだ將軍であった。義満が京都に金閣を建て、茶道を開いたのをうけて、自分は銀閣を建て、風流を愛していた。このころ画人には明から帰化した相国寺の如拙、そのでしの周文などという名手もいた。

こうした時代に生まれたということが、すでに雪舟はめぐまれているといわなければならない。

その上、雪舟は生まれながらに画の天才をもっていたのである。雪舟が天才であったことについて、こんな話がある。

雪舟は十二、三のころ、同じ国にあるお寺に小ぼうずとしてあずけられていた。この寺は、特別、修行のやかましい寺であったが、それでも雪舟は、お経を読むひまをぬすんでは絵をかき、くけいこをしていたので、いつもしかられていた。

ある日のこと、例によつてお経の勉強をおこたつて、こつそり絵をかいているところを、おしゅうさんに見つかつてしまつた。もう三度や五度のことではないので、おしゅうさんも、きょうこそは日ごろのくせをなおしてやろうというので、雪舟をつかまえて、本堂の柱にしばりつけた。さすがの雪舟も悲しくなつて、しくしくなきだし、流れ出るなみだがぼたりぼたりと本

堂の板の間をぬらした。雪舟は、初めそれを足の指先でつついていたが、急にかれの顔はいきいきとかがやき始めた。雪舟は、もうさびしさも悲しさもわすれたかのようにである。

しばらくして、おしゅうさんは、あれだけせつかんしたらいくらかききめがあつたらう、雪舟はどんなにしているだらうと思ひながら、本堂をのぞいてみると、柱にしばりつけられた雪舟の足もとに、ねずみが一ぴき、今にも雪舟の足に食いつこうとしているではないか。おしゅうさんがこれはたいへんと走り寄つてみると、なあんだ、それは雪舟がなみだを使って足の指でかいた絵ではないか。

この時、おしゅうさんは、雪舟のこの才能をのばしてやろうと感じたのであろう。それから雪舟に絵をかくことを許した。



雪舟は、おしよさんの心に深く感じて、それからはいっしょうけんめいに勉強をし、絵も一心にけいこした。

雪舟はだんだん成長するにつれて、

「こんなことをしていたのではだめだ。都へ出て、よい先生についてもっと深く勉強しよう。」

と考へ、京都に出て相国寺にはいり、さらに、鎌倉かまくらの建長寺にもはいって修行した。

雪舟が画家として大成したのは、この生まれつきの才能があったからということも一つの理由であるが、ここで見のがしてならないのは、絵の勉強ばかりでなく、むしろそのもとなる心の修養を積んだことである。

雪舟の勉強はさらに続いた。日本の画家や、明から日本へ来ている画家だけでは満足できず、ついに自ら明にわたって勉強しようとは決心した。当時、明にはすぐれた画家、学者がたくさんいたからである。

雪舟のこの願いはとうとうかなえられた。雪舟は四十八才にして明にわたった。

喜び勇んで明にわたった雪舟は、心の修行と絵の勉強をした。しかし、明でも雪舟を満足させるだけの師はいなかった。雪舟はいつもあきたらず思っていた。

ところが雪舟の目は開けた。心は開けた。自分の師は人ではなく自然である。この明の大きな自然こそはわが師であるとき

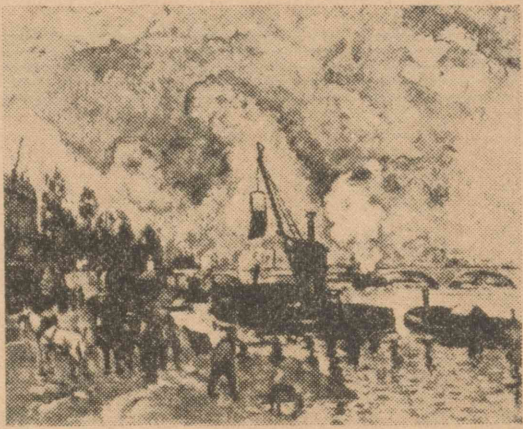
とったのである。

すぐれた芸術家というものは、みなここにたどりつくものである。西洋でも、レオナルド・ダ・ビンチや、ミケランジェロ、また近代では、セザンヌやゴッホ、そういう人たちも、自然はもつともすぐれた大きな師であると言っている。

雪舟は三年というものを、大きな自然の中にひたり、自然を師とし、友としてくらしした。明はさすがに大きな国である。自



然もどこかのんびりとして大きく、かつ変化もあり、それに地質的にみても、日本とはだいぶ異ったところがあつた。雪舟は、まことに、この自然だけは自分の目で見、自分の心で感じなければならな



いものであると思つた。この自然に対してみひらかれた雪舟の目こそ、生きていたといえよう。

雪舟のえらさは、第一には、八十七才という年まで自分の才能をいかすことにうちこんで、どこまでも勉強を続けたことであり、第二には、自然を師

としてももの真實をつきとめたこと、第三には、広く名画に親しみ、これをつきつめていった結果、画の世界に一つの新しい境地を自分の中から開いたことである。雪舟のすぐれた芸術家たるゆえんは、じつにここにあるといわなければならぬ。

シューベルトの子守歌

少年シューベルトは、「広告紙にでも作曲するだろう」といわれるほど、作曲に対する熱情を持っていました。シューベルトの頭の中から、泉のようにこんこんとほとばしり出る曲は、貪しいシューベルトの買う五線紙では、まにあわないほどでした。

「五線紙が欲しい。五線紙さえあれば。」

シューベルトは、気もくるわんばかりにさけぶのでした。ほかの生徒たちのように、おかしを買うことや、くだもののをうるおすことのできないことは、ど



うしてでもしのべるのでしたが、このわきいでる楽想を、そのままに書きとどめるものないことは、シューベルトにとって、どんなに苦しく、悲しいことであつたでしょう。

ある時は、兄にあてて、こんな手紙を書いたことがあります。

わたくしのいさんへ

子供たちは、おかしやりんごが時々食べたくなります。そまつな夕食までの八時間半もの間待つことは、どんなにかつらいことですか。でも、わたくしは、それくらいのことにはがまんしますけれども、せ



つかくわいてくるメロディーを書きとめる五線紙のないことは、とても悲しいです。にいさん、お願いです。わたくしに五線紙をめぐんでくださいませんか。

シューベルトの作曲に対する熱情は、とうていふつうの人の想像もできないものでした。

○

それは、一八一二年の冬のみじめな一日でした。学校からくられるたきぎだけでは、とうていがまんのできない寒さでした。ほかの生徒たちは、自分のこづかいてたきぎを買って、へやをあたためたり、食事から食事までの長い間のたえかねるひもじ

さも、おかしやくだものを買ってしのいでいましたが、貧しいシューベルトには、たきぎを買ってあたたまることも、おかしを買ってひもじさをしのぐことも、あたたかいオーバーにくびすじをうずめることもできませんでした。

雪はあいかかわらず、まどの外の暗い空から音もなく落ちてきて、まどのところで急に白く、濃く、しんしんと降りそそいでいました。

その時、ドアをノックする物音がしました。けれども、作曲にむちゆうになっっているシューベルトには、その音が聞こえようはずがありません。ドアがあいて流れこんだ冷たい風が、五線紙をふきめくった時、初めて人の気配を感じたのでした。シューベルトはペンを持ったまま、不快そうにふりかえりました。

入口に立っているのは、雪を白くかむったままの兄フェルデ
イナンドだったのです。あかりを受けた兄の顔に、たとえよう
もない悲しみの色がうかんでいるのを見ただけで、シユーベル
トは、ぎよつとして、何か不吉なものを感じました。

「にいさん、おうちに何かあったんですか。」

兄は重たくうなずきました。

「おかあさんがとつぜんなくなられたんだ。」

「え、おかあさんが。」

何という意外なことでしょう。本当とは思えないのでした。

つい四、五日前の日曜日の夜、家に帰って、自作の曲を、父や
兄たちといっしょにかなでた時、父がまちがったといつてわら
っていた、あの元気な母。

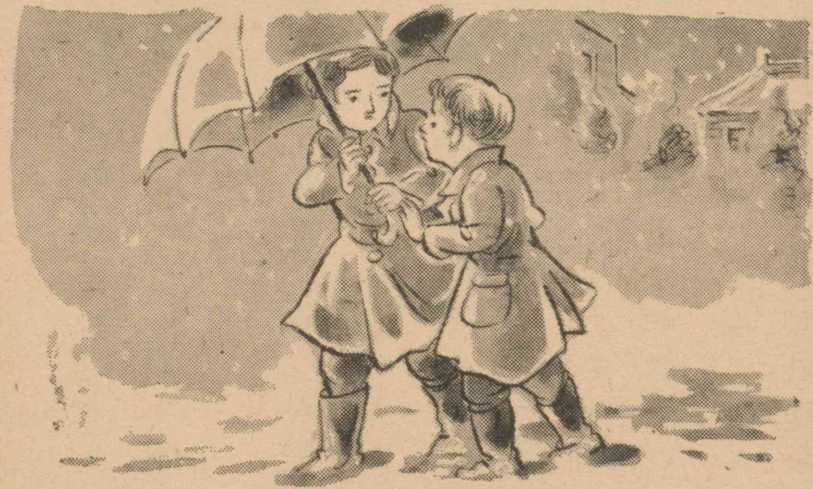
「にいさん、本当でしょうか。」

そのさけびにも、兄はただ、だまっ
てうなずくばかりでした。

「早く、にいさん。早くぼくを連れて
行ってください。おかあさんのとこ
ろへ。」

雪はまだ降り続いていきます。その中
をふたりは、わが家へと急ぎました。

ドアを開けてはいると、なつかしい
ともしびの中に、父も兄弟たちも一様
に、冷たくなつた母をとりまいて、う
なだれているのでした。



「おかあさん。」

そうさげんだきりです。シューベルトは、その冷たい、もうふたたびだいてくれない母によりかかって、おぼれてしまうほどなきむせびました。

シューベルトの頭の中には、ありし日の母の姿と、そのあたたかい愛情が、つぎつぎとよみがえってきました。いつだったか、父にピアノを習っていた時、何度もまちがえて、父にはげしくしかられたことがありました。その時、そつとシューベルトの手をひいて、ひとけのない木立の庭で、うとうとねむるまで、やさしくだいて歌ってくれた母。それは、本当にやさしい、じ愛の心にあふれた歌でした。

その思い出の中から、シューベルトははつきりと、あの時の母の歌を思いだすことができました。それは、クロード・ディアスの歌詞に、母がかつてにリズムをつけて歌っていたものでした。シューベルトは、はつと立ち上がりました。

まるで、魂にすてさられたからだのように、ふらふらと母のそばをはなれると、屋根うらの自分のへやにかけ上がって、熱情にあやしうかがやくひとみを、投げつけるようにノートにそそぐと、聞きとれないほどの声で口ばしるのでした。

ねむれ ねむれ 母のむねに

ねむれ ねむれ 母の手に

つぶやきには、いつかりズムが生まれてきて、いつしかペンを持つ手も、ちぢれたかみも、顔も、ゆりかごのようにリズムの中にゆれるのでした。



「おかあさんの声だ。おかあさんの声だ。シューベルトは、むちゆうで、ペンをノートに走らせました。」

母のなきがらのあるへやへおりて来ました。そうして、母のそばに立って、

「おかあさん、ぼくの心からはなむけです。」

そう言つて、シューベルトはピアノに向かい、こころよい静かな前奏をひいた後、美しい声で歌い始めました。

ねむれ ねむれ 母のむねに
ねむれ ねむれ 母の手に

こころよき 歌声に

むすばずや 楽しゆめ

それは、母がありしころ口ぐせのように、長い年月をいとし子たちのために口ずさんできた子守歌でした。

おとなたちは、この悲しみの夜に、つつしみのないシューベルトだと、一度はまゆをくもらせたようでしたが、いつか、その何ともいえないメロディーに、母のあたたかい心がいきいきとそれぞれのむねによみがえり、なみだをいっばいにしてうなだれるのでした。

歌うシューベルトも、聞く者たちも、みな母の思い出のうちに、魂をゆすぶられました。

詩歌の味わいかた

大空のちりとはいかが思ふべきあつきなみだの流るる
ものを

空が青く見えるのも、にじが七色に見えるのも、このちりがあるからである。空の美しさや、にじの美しさだけを知らず、ちりの存在を見わすれているのが世の常である。

それどころではない。「ちりあくたのように」といえば、物事を軽んずるたとえに用いられ、「ごみのように」といえば、むさくるしい物ときめてしまっているのが人情である。すべて形の

表面だけを見て、そのおく底をきわめようとしなのが、まちがいの始まりなのである。

大空にうかぶちりは、さまざまな形に、さまざまな色にかがやく。そして大気の中をただよいながら、だんだん下の方へ下がっていく。地上に落ちた時に、そのちりはかがやきを失って、土くれにまぎれてしまう。しかし、大空にあるちりは、数限りもなくわき立って、まるで生きているもののようにである。太陽の光線があたると、生命のないちりの一つ一つが急にいきいきとかがやきだす。

この不思議さ。

天地の大きさから見れば、人間とてもけしつぶにたりない存在である。大空をあいっていると、いつとはなしに両の目にた

まってくるなみだ。これこそ大きなものの実相にふれ得た人間のなみだなのである。

つばきのかげ女音なく来たりけり白きふとんをほしにけるかも

ましろなるふとんの上にただひとつつばきの花のこぼれて久しき

この作者が伊豆の大島に旅行したおりの連作の一つである。つばきのかげに女がそつと来て、白いふとんをほして行ったという、ただそれだけの歌であるが、よくよく読み味わってみる

と、なんでもないところに、作者の苦心のあとがうかがわれる。

それは、「つばきのかげ」と重く字あまりのあたまをうけて、「女音なく来たりけり」となだらかに歌い流している技法である。しんかんとした戸外の光線と、その中を音もたてずに動いて行く人のかげとが、真昼の世界にくつきりとえがかれている。「白きふとん」というのは、しき布のついたふとんのことであろうが、そのすぐ上には、まっかなつばきの花がさいており、しかも青い海と空とがまわりをとりまいてるのである。作者は、こうしたことがらをいちいち説明してはいないが、いかにも印象がいきいきとしている。

大きなつばきの木ありあかあかとひとつも花を落とさざりけり

大きなつばきほたりと落ちしなりびっくりするな東京の子供

大きなつばきの木が花をいっばいつけて立っているが、そのつばきはまだ一つも花が落ちていない。木全体がまっかに光りかがやいているようだ、心の底から本当に感じいつて見ているのである。

そのつばきの花がほたりと音を立てて落ちた。花びらがくずれて散るのではなく、花全体がそのままの形で落ちたのである。こうした実地をあまり見かけない東京の子供たちは、さぞおどろくだらうと、じつは自分自身が目をみはっているわけである。

思いきつただいたんな表現で、ずばりと言いきつているところを味わわなくてはならない。作者が神奈川県三浦郡三崎村に住んでいたころの歌である。

赤いつばき白いつばきと落ちにけり

つばきの木がある。赤つばきの木の下には赤い花が、白つばきの木の下には白い花が、同じように落ちて重なっている。それがいかにもあざやかな色どりをもって、見る者の目にうつってくる。見たままを、ありのままに写しているの、ちようど子供の自由画のような力強さがある。

ここでだいじなことは、「落ちにけり」という表現で、これを、

もし、「散りにけり」としたら、つばきの花のぼったりとした感じがなくなってしまうのである。前の短歌と似かよった俳句の世界である。

つばきの花から菊の花にうつってみよう。

もめんながらよき衣着まきたり菊の花

菊の花は、ぼたんやダリアなどのようにはでな感じの花ではない。黄菊にしる白菊にしる、何よりも気品の高い花である。春のもやもやした大気の中で育つ花ではなく、やはり秋のすみきった光線の



うちに、かおりをはなつ花なのである。

その菊の花をもめんに見たてたのである。きぬもののように、よそゆきのぜいたくさはないが、もめんはもめんでも質のよいものを着ているといったところに、この句の味わいがある。

つぎに、白秋の選んだ児童自由詩の中から、菊の詩を選んで比べてみよう。

菊がつぼんだ。

おかあさんが

いわしを買って来た。

短い、よく見てよく写しとっている。むだなものは一つも

ない。ぴしつというひびきをたててせまつて来るような、するどい感覚である。その子は、その時庭先にでもいたのである。菊のつぼみがふくらみかけて、よいかおりがただよつてくる。そこへおかあさんが買物から帰つて、その子のそばを通り過ぎようとしたのであろう。おさらか何か、入れものの中で、いわしが光つて見えたのである。なまぐさいにおいが、花のかおりの中にとけこみ、その子の鼻口をおしてきたのである。俳句のように短い形のうちに、これだけの内容がもりこんであることを知らなければならぬ。

かれた菊に

ほこりがたまる。

風のあたる木に

すずめの声

花色の美しい、いきいきした菊ならば、けつしてほこりはたまらないはずである。おそらくこの菊は、しもにうたれてすがれてしまったのであろう。そうしたあとの秋の終りころの小景。朝でもなく、夕方でもなく、たぶん昼前後であろうと思われる。水気もうせて、半ばくずれかかったような菊の花に、ほこりが白く積もっている。そこへ風がふいて来て、花びらがゆれ、ほこりがふりこぼれる。その近くの木のえだでは、すずめが風に乗って遊んでいる。すずめの声はつきりと耳にとおるのである。

想像で書ける詩ではない。こしらえもので、これだけの細かい観察はどうていできない。

かき食べばかねが鳴るなり法隆寺^{ほうりゅうじ}

この句は、作者が、寺内の茶店に休んでいる時、即興的にできたものらしいが、「かき食べば」が、いかにも明かるく、のびのびしていて、法隆寺のいかめしさを逆にひきたてている。

ふたたび児童自由詩にかえて、こんどはおもむきの変わつたものを示そう。夕日を題材にしたものである。

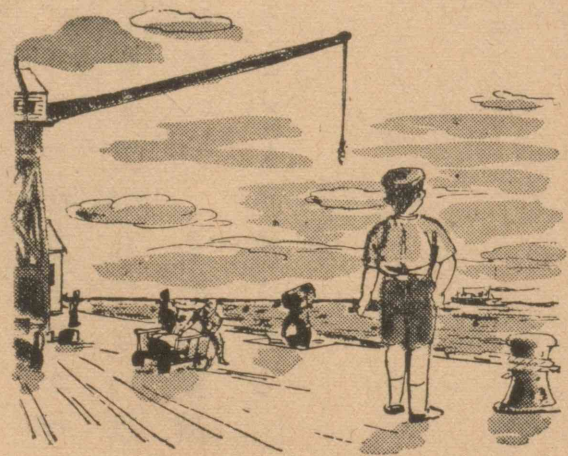
でっかい夕日が

起重機の中に、はさまっていたから、
まつがえのがんぺきにかけていった。
とうさんはまだ来ぬか
と思つて待つていた。

海は

まっかい毛布が

ゆらゆら ゆれるように見えた。



この場合、「でっかい」というようならんぼうなことばが、耳ざわりにならないばかりでなく、つぎの「起重機の間にはさまつていた」とともに、夕日のやけただれた感じを、力強く表わ

すのに役立つている。たぶん、この子のおとうさんは船に乗って
いて、帰って来るのであるろう。この子は、家で待ちきれなく
なって、がんぺきにかけてだして行ったのであるろう。

——まだかまだかとむねをおどらせている目の前には、夕日
の反しやで、海がもえひろがり、ちようど、まっかな毛布がゆ
れているように見える。おとうさんに対する愛情がせつないほ
どよくでてている。ことさら説明はされていないが、その起重機
の反面には、長いかげがのびているだろうことも想像される。

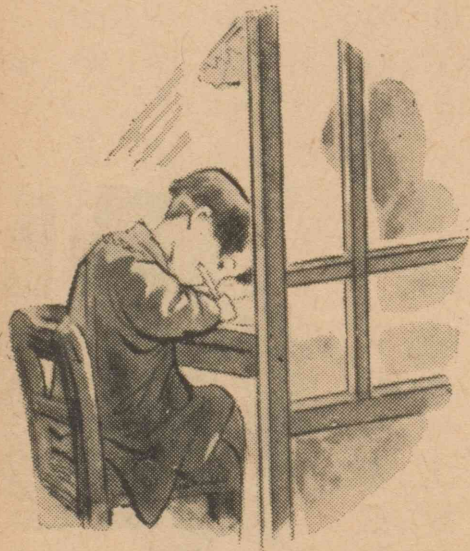
○「芸術をうむ心」の三つの話で、何をさどったであろうか。

「雪舟」では、自然を自分の目で見ること、

「シューベルトの子守歌」では、深い感じき、

「詩歌の味わいかた」では、つくりだす心持、

もう一度、自分の心の中をふりかえり、また本を読みかえしてみよう。

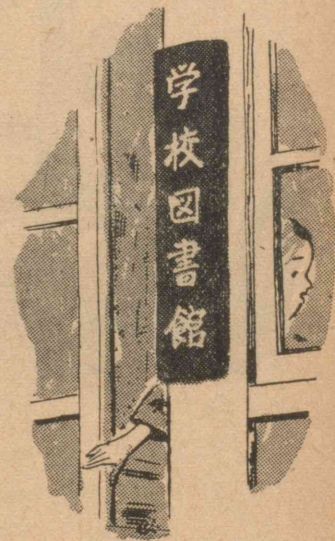


二 読書の秋

新しい学校図書館

つやのある黒いうるしぬりのかけふだに、「学校図書館」という字が白くうき出ている。きれいにみがかれたへやのまどからは、すみきった空が深い海のように遠く続いている。これこそ、わたしたちの学校図書館である。

学校図書館がわたしたちの学校に作られたのは、つい最近のことだ。前から、似たものがあるにはあつたが、しかしそのころは名まえも「児童文庫」といつていたし、図書の分類や整理



の仕方なども、今とはちがった不完全なものであつた。それに、集められた図書なども、童話や軽い読み物の類が多かつた。それが、今度、P・T・Aの協力によつて新しく本を買い入れて、りっぱな学校図書館にしようということになつたのである。

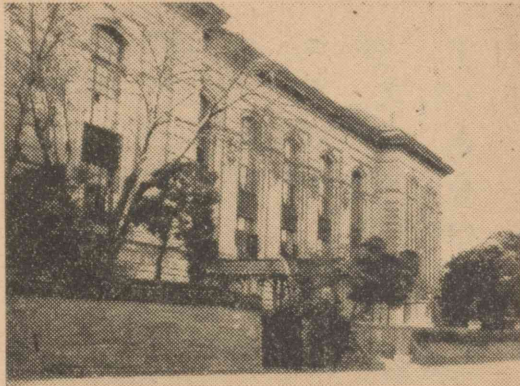
戦争が終つて、古い日本から新しい日本への第一歩が始まるうとする時、図書館は、国民の心のかたとして、なくてはならないものである。というのは、図書館には、あらゆる人間のすぐれた業績が、記録となつて集められているからである。

わたしたちは、書物によつて物事を知ることができである。物の考え方や研究の仕方を学ぶこともできるであろう。心の深さや、生活の仕方を教えられることもある。書物は人間

の営んできた尊い文化の結晶であり、また、ある意味では、わたしたちは書物によつて、過去の文化をうけつぎ、さらに、これから何をつくり出していくかという、現代への課題を考えるのだといえよう。

図書館が人間の文化的成長にたいせつであるように、学校図書館は、わたしたちが、生きた勉強をしていく上のたいせつな施設である。学校図書館が学校の心ぞうであり、学校のもつともいきいきと働く場所であるといわれているのは、こうした理由によるのであろう。

「学校図書館」 たった五字ではあるが、この五字がどれほどわたしたちの心に、いきいきと緑の葉をひろげてくれることであらう。



しかし、よい本がたくさん集められてこそよい学校図書館であつて、本のない図書館というようなものはおよそ意味のないものである。また、たとえたくさんのお書があつたとしても、よく利用されなかつたら何の役にもたないであらう。このことは学校図書館にとつてたいせつなことであつて、ここからいろいろな問題と仕事が生まれてくる。

学校図書委員の仕事

今、わたしたちは図書委員会を組織して、学校図書館を運営

している。四年以上の、図書に興味をもった者たちで、学校図書館の、本の分類から、整理・貸し出し・記録・調査などいっさいの仕事を手分けしてやっていこうというのである。

つい近ごろ買った本に「文字とことばの歴史」というのがある。文化シリーズの一さつであるが、さてこれをどのよう整理したらよいか、そんなところから研究が始まる。

日本十進分類表によると、総記(〇〇) 哲学・宗教(一〇) 歴史地誌(二〇) 社会科学(三〇) 自然科学(四〇) 工学(五〇) 産業(六〇) 美術(七〇) 語学(八〇) 文学(九〇) となっており、さらに細かく十に分けられている。

「文字とことばの歴史」は、いうまでもなく語学(八〇)に属すべきものであろうし、語学の中の「文字・かなづかい・字引

文法」によって(八一)の番号があたえられる。

また、「海流の話」というようなのは、いうまでもなく自然科学(四〇)であり、自然科学の中の「海洋学と陸水学」により、分類番号(四五)があたえられる。

しかし、これはなかなかむずかしい仕事であり、わたしたち委員だけでは決めにくい場合が多い。

番号ができる、図書目録に書き入れ、本のせにも番号を書き入れた図書箋せんがはられて、書架へならべられる。こうして書架の位置がきまり、目録ができて、初めて図書が、ちつ序正しく利用されることになる。

わたしたち図書委員は、このような仕事もできるだけ自分たちの手でやっていこうと相談した。仕事をしていくということ

は楽しいことだ。「なすことによつて学ぶ」ということばがあるが、わたしたちは、本当に、いろいろな仕事をするることによつて、本に対する親しみの心を深くしている。

読書クラブ

図書委員たちは、どうしたらみんながよく本を利用してくれるか、楽しく読書するかということをお話した結果、読書クラブを作ろうということになった。もちろん、本を利用するのは読書クラブの人たちだけでなく、みんなが研究のためや楽しみのために、できるだけ多く利用することはいうまでもないが、クラブの人たちは、中でも読書に深い興味と関心を持った人たちの集まりで、いわば「読書ずきの集まり」ということにもなる。そして、つぎのようなポスターを、手分けして書き、学校図書館のけいじ板や、校内の見やすい所へはり出した。

読書クラブを作ろう

読書クラブを作って、みんなで本を読み合おう。

本は知識の泉だ。文化へのかけはしだ。

健康なからだは運動から、健康な心は読書から。

☆読書クラブの人は、みんな読書ノートを書こう。

☆読書クラブの人は、新しい本のひ評会をしよう。

☆読書クラブの人は、作品の研究会をしよう。

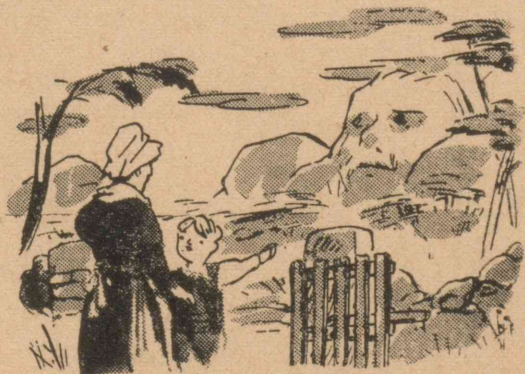
今では会員の数も多くなり、みんな楽しい心で読書ノートを書いたり、本のひ評をし合ったりしている。

いわおの巨人

私は、最近、学校図書館で「いわおの巨人」という本を読んだ。非常に感げきしたので、これを読書クラブのみんなに回らんすることにした。それは、こんな物語である。

○

太陽が西の空をあかねにそめて、しずんで行こうとしている。その夕ばえの中に、くつきりとうき出している「いわおの巨人」。アーネストは、母といっしょにかどべに立って、じつとそれを見つめていた。



「いわおの巨人」とは、いったい何だろう。

一マイルばかりはなれた山の中ほどに、みごとにえがき出された巨人の顔。それはまったく、自然のすばらしい芸術であった。大きな岩が、まるで生きた人間の顔のように、天然にきざまれていて、じ愛に満ちた、あたたかな、けだかい表情が、じつとこの村のなりゆきを見まもっているかのようなのである。

「おかあさん、なんだか話しかけそうですね、あの顔は。」

「そうでしょうとも。ね、アーネスト。この村には、大むかしから一つの言い伝えがあります。それはね、いつか、この村からあの顔そっくりの人が現われて、この村を幸福にするというのです。いく百年、この村はその人を待っていることでしょう。でも、まだ、その人は現われないのです。」

アーネストは、いつか、こぶしをにぎっていた。
「おかあさん、きつと、ぼくはその人に会えますね。」

そそり立つ山のふところにいだかれたその村は、静かな、平和な村であった。あの夕やけの中で聞いた言い伝えは、かた時もアーネストの心をはなれず、「いわおの巨人」をあおぐごどにかれば、新しい希望と期待に、おさないむねをふくらませた。

いく年かたった。だれからともなく、こんなうわさが村中にひろがった。

「小さいころこの村を出て、都で大金持になって近く帰って来る人こそ、『いわおの巨人』そっくりだ。」

先祖代々待ちかねた、言い伝えの人がとうとう現われた。村中は、その人をむかえる準備にわきたった。アーネストも、その人の帰る日を、きょうかあすかと待っていた。

その日は来た。音楽は空にひびき、花輪は道をうずめ、村はお祭のようなさわぎだった。やがて、馬車からおりたその人のすがたを見て、村人は、「そっくりだ」「いわおの巨人だ」と、我をわすれて歓げいした。だが、アーネストは失望した。その欲深そうな態度、思いあがった顔。どこに「いわおの巨人」の、あのやさしい、あたたかな表情が見られるだろう。

悲しげにだまって、「いわおの巨人」を見つめているアーネストには、巨人がこう言ってなぐさめてくれるように思われた。
「きつと現われる！心配するなアーネスト。きつとそのうちに。」

またいく年かたった。今は、アーネストもりっぱなわか者になつていた。一日の仕事が終ると、かれはいつも、じつとひとりで、「いわおの巨人」をながめては考えこんだ。しんせつでまじめなアーネストは、すべての人から愛されていた。大金持はすでに死に、あのすばらしい富も、どこかへ消えてしまった。そのころ、また、こんなうわさがひろがった。

「この村出身の大將軍が帰つて来る。この人こそ『いわおの巨人』そっくりだ。」

ふたたび村はわきたつた。しかし、前にもおとらぬ感げきと歓げいの中に、ゆうゆうと村に帰つて来た將軍を見て、アーネストはやっぱり失望した。かれはそつとひとりてつぶやいた。

「ちがう！『いわおの巨人』は、こんな冷たい、厳格な顔じゃない。」

ためいきをつきながら山を見上げるアーネストに、「いわおの巨人」は、またささやく。

「心配するな、アーネスト。きつとそのうちに！」

この平和な村に、月日がまた、やのようにすぎた。アーネストはもう中年になつていた。けつして、りっぱな身分とはいえないし、大金持でもなかつたが、素ぼくで、誠実な、そして考への深い人として、かれは村中に知られていた。それは、いつもかれの心に、「いわおの巨人」が無言のうちに希望をあたえ、心をはげまし、導いてくれたからである。

あんなに歓げいした將軍も、じつは「いわおの巨人」でなかつたと知つて、人々の心からその名は消え去つていた。そのこ

ろ、やはり小さい時に村を出て行って、今では、ある政党の指導者として、すばらしい勢いの政治家が帰って来ることになった。その人の顔が巨人そっくりだという。

今度こそと、村人たちの期待は大きかった。やがてその人が帰って来た。ばんざいの声、まいくるう旗、ぼうしを投げる者、さげぶ者。

「見ろ、『いわおの巨人』そっくりじゃないか！」

だが、その顔には、巨人のじ愛深いまなざしはなかった。おおく深い理想をたたえたほおえみはなかった。アーネストはがっかりして答えた。

「ちがう。ちつとも似てやしない。」

熱きようする群衆をあとに、かれはひとりでその場を去った。

馬車や人ごみのちりにかくされていた「いわおの巨人」は、またうかび出た。そのくちびるはアーネストに言う。

「わたしはここだ。アーネスト、心配するな。わたしはおまえよりずっとずっと長い間待っているのだ。きつとそのうちに。」
あわただしく、またいく年か過ぎて、いつの間にか、アーネストのかみは白く雪をいただいていた。しかしかれは、一日も「いわおの巨人」と心で語り合い、その無言の教訓を聞くことをやめなかつた。アーネストの名は、今は村をこえてひびきわたり、わざわざかれと話しに来る学者や教授さえあつた。話した人はみな、その誠実や、深い愛情や、いつとはなく創造された尊い人格にうたれ、感動と尊敬でむねをいっばいにして帰って行った。そして、帰りながら巨人の顔をあおいではつぶやいた。

「あの顔は、どこかで見たことがあるようだが……」

ある日、アーネストは、かどべのベンチにすわって、一さつの詩集によみふけていた。その詩は、この村から出た有名な詩人の作である。一行一行からにじみ出る美しい感げきに心をうばわれて、かれは「いわおの巨人」に向かつてつぶやいた。

「おお、この人ではないだろうか、予言された人は」。

巨人はちらとほおえんだように思えたが、何も言わなかった。その時、その詩人は、アーネストのささやかな家に向かつて急いでいた。アーネストのことを聞いて、ぜひ会いたいものとはるばる遠くからたずねて来たのである。

近づく、ひとりの老人が、書物を手に、その一ページページと「いわおの巨人」とを、かわるがわる見比べている。そ

れがアーネストだ。詩人が、ひとばんとめてもらえまいかとのむと、アーネストはさつそく承知した。

ふたりはベンチにならんでこしをかけ、さまざまの話を始めた。アーネストの純ぼくなことばの中から、真実が泉のようにほとばしり出て、力強く詩人の心を打ち、アーネストもまた、詩人の理想にもえることばを聞くと、心のすみずみまで清められていく気がして、いつかふたりの魂はともにふれ合った。

ふと、アーネストは詩人を見上げて言った。

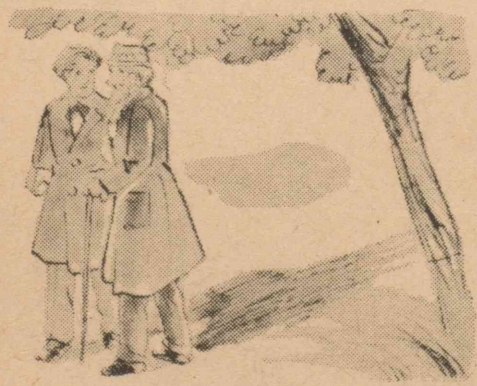
「あなたこそ、わたしがきょうの日まで待ち続けていた、『いわおの巨人』ではないでしょうか」。

「いやいや、それはあなたの誤りです。なるほど、わたしの詩はすばらしい理想をかなでているかもしれませんが、しかし、

それは理想の国のゆめです。わたしの実際の生活とは異つて
います。わたしは、とても『いわおの巨人』とはいえません。
夕日が西の山に急ぐ。アーネストは、いつものとおりに、集ま
つて来た近所の人々に、年をへた大木の葉かげで、話を始めた。
「いわおの巨人」は、きょうもあのやさしさとどじ愛をたたえて、
それを見おろしている。自分の心に思うことを、ありのまま述
べるアーネストのことばの力強さ。それは、いく十年かの人生
を、正しく、希望をもつて生きぬいて来た人の口からだけしか
聞くことのできない、生命の声であつた。詩人は、これこそ、
今まで自分が作つたどの詩よりも尊い、生きた詩であると思つ
た。聴衆は水を打つたように聞きいつていた。

その時、金色の夕日が、ひとときわあざやかに「いわおの巨人」
を照らし、夕もやが、アーネストの白いかみを思わせるように、
そのまわりをつつんだ。とつぜん、手をうつつて詩人はさげんだ。
「見よ！見よ！この人こそ、『いわおの巨人』だ！」

人々はおどろいてアーネストの顔を見た。見よ、そのこうご
うしいひとみのがやき、愛とちえをたた
えたひたいの広さ。「いわおの巨人」そのま
まではないか。予言は今こそ実現したのだ。
しかしアーネストは、話をおえると、詩
人の手をとつて、静かな歩調で家路につい
た。いつの日か、自分よりもつとりつぱな
かしこい、「いわおの巨人」が現われること
を期待しながら。



私は、この話について、つぎのように読書ノートに書いた。

「いわおの巨人」……ナタニエル・ホーソーン（アメリカ人）原著

（話のあらすじ）

人間の顔をした岩についての言い伝えとアーネストの物語

- 1 いわおの巨人が、大金持となって現われたと思った。
- 2 いわおの巨人が、大將軍となって現われたと思った。
- 3 いわおの巨人が、大政治家となって現われたと思った。
- 4 いわおの巨人は、アーネストではないだろうか。

（感想）最後の五行の意味が深い。

○秋は、むかしから、「燈下親しむころ」といって、読書に適した季節です。「読書週間」などのあるのも、このためでしょう。

○みなさんの学校の学校図書館や、学級文庫のようすを、作文に書いてごらん下さい。

○図書委員の働きについて、この本に書いてあることを参考にしてください。

三 エンジンのひびき

歯車の話

昭和十七年の六月初めのある日のことである。仙台の東北大学工学部の成瀬博士のところへ、宮城県庁から電話がかかってきた。

成瀬博士が電話口へ出てみると、電話は、当時の経済部長からで、至急お目にかかりたいから、そちらへおうかがいするといふのであった。博士が、午前中の講義をおえて自分のへやへ帰って来ると、もうそこには経済部長をはじめ、だれだかわか

らない大勢の人がつめかけて、博士を待ちうけていた。

用件をきくと、

「仙台の東北にあたる佐沼という町にある、田に水をひくポンプがこしようにして、どうしてもなならない。佐沼町の付近には、千五百町歩の水田があつて、そのポンプがなならないと、それだけの田地が、ひあがつてしまう。むろん、全力をあげて修理につとめたけれども、どうしてもなならない。ポンプ会社では、『もうだめです。ことし中は水があげられません』と言った。ことしこの水があがらなければ、それだけの水田の植えつけが全部だめになる。そこで、県では大さわぎを始めて、とにかく成瀬博士に、今すぐそのこしようにもようを見にいつていただききたい。」

と、言うのである。

これには、さすがの工学博士もよわった。専門の人たちが、それほどほねをおってなおらないものが、自分の手ではたしてなおるだろうか。それが第一。それから博士は大学での講義や、学生たちとの研究というたいせつな仕事があり、そういうことをやりっぱなしにして、今すぐその現場へ出かけて行くということができない。これが第二。

博士が、そういう事情で返事をためらっていると、その大勢の中から、ひとりのせの高い人が、つかつかと博士の前にてきて、

「先生、いま農家の人たちは、この生きるか死ぬかの問題で血眼になっています。私は、この仕事の責任者です。もし、あ

なたがおいでくださらなければ、私は、それらのものの前で自分の命をすてるかくごでいます。」

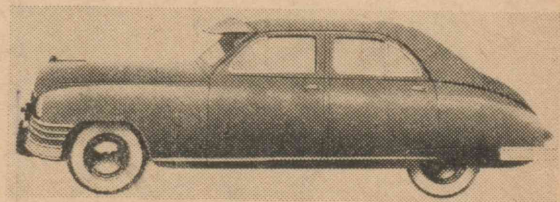
と、言った。

そのことばを聞くと、博士は、とっさに心を決めて、

「それではまいりましょう。そのかわり、自動車をよこしてください。それも、ほかの自動車ではこまります。知事の乗っていられる自動車をよこしてください。」

と、言った。この博士のことばに、思わずみんなが顔を見合わせた。どうして博士ともあろう人が、こんな子供の言うようなことを言いだしたのであるかと思つたのであつた。しかし、博士がこういうことを言ったのには大きな理由があつたのである。博士は、齒車については世界的なすぐれた学者であつた。そ

して、それまでも国産の自動車の歯車について、いろいろ研究を重ねてきた。ところが、その博士に、たった一つの頭つうのたねがあった。それは、博士が手がけた国産の自動車の歯車が音をたてるということであった。その後、博士はアメリカへ行って、アメリカでいちばんよい歯車をつくる自動車会社だといわれているパツカードの工場にも行って見たが、その時工場は休んでいて、パツカードの自動車に乗ってみたいという博士の希望は達せられなかった。日本に帰ってから、この博士の願いを実現する機会はないか得られなかった。ところが仙台に来てから、博士は、知事



の乗用車が、そのパツカードであることを知って、いつか一度それに乗って、どんな歯車の音がするか聞いてみたい。パツカードの自動車がどんな技術をもっているか、それを知りたいと思っていたのである。博士は、このちょうどよい機会に、こんな子供のだだをこねるようなことを言つて、その多年の研究欲を満たしたいと思つたのである。こういう急ぐ場合にも寸くそをむだにしないで、技術者としての良心をいかそうとしたのであった。

さて、その日の夕方、博士は、望みどおり、パツカードの自動車に乗って、佐沼へと向かった。

ほそう道路を走っている時はもとより、いなか道へかかって

も、パッカードは、まるで歯車の音をたてなかった。博士が、佐沼町に着いて、その町のはずれの水田の始まるどころから、問題のポンプのすえつけてある水田の終るところまで行くのに、パッカードは二十五分かかった。これがだいたいの水田千五百町歩の広さで、そこからとれる米が、まず四万石、その四万石の米の運命が、いま博士の手の中にぎられているのである。

博士が、現場に着いて高いい防から石だんをくだって機関場の中へおりていってみると、中は、足のふみ入れる場所もないほどに混雑している。そして、西日の残っている西向きのまどからは、付近の農家の人たちの心配そうな顔がいくつもぞきこんでいる。

博士は、まず機械の台を調べた。台には、さいわい何のこし

ようもなかった。つぎに台をとめてある「ねじ」を調べた。「ねじ」がゆるんではないか。ここにも、何のこしようもなかった。つぎは「じくうけ」。これがあやしかった。「じくうけ」が焼けて色が変わっているのである。

最後に歯車。ところが、この歯車の歯型とすん法とがめっちゃめっちゃになっている。つまり、こしようは、この歯車から起こり、そこに熱を持ったため、この熱が「じくうけ」に伝わり、そこが焼けたことから起こったのである。

ここまで調べた博士は、これなら修理はたいじようぶだと思つた。歯車の歯の型をなおし、まわりかたの悪いために起こる熱の発生をできるだけ少なくする。どうしてもとりきれぬ熱は、「じゆんかつ油」でとることにする。あとは焼けた「じくうけ」

をなおせばそれでよいのである。

ところで、ここに問題が一つ残る。それは、修理に要する時間ということである。

その歯車は一つは直径が三〇センチ、厚さが二・五センチ、もう一つの方は、直径が、約六〇センチ、厚さ二・五センチもある。このくらいの大きさのものになると、その重さもたいへんである。これをなおすには、ともかく東京まで運ばなければならぬ。ところが、当時は戦争中であつたから、それを運ぶといつても、第一に貨物自動車の手配がつかない。手配がついても、その輸送だけに一週間はかかる。その上、それを受け取つた工場でも、そのころはいそがしかったので、すぐ修理にかかれるかどうか疑問である。だいたい、いつごろまでになおせばこと

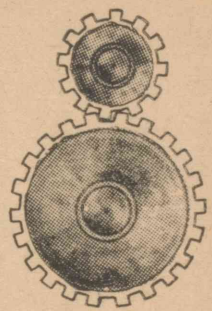
しの水あげの間にあうのかということを書きいてみると、六月の二十日が最後の期限であると言う。その日は六月の九日であつた。

しかし、それを東京に持つていって、歯切機にかけて歯を切りなおし、それから焼きを入れ、また、といしにかけてけずりなおすということになると、どうしても一年の月日がかかる。それでは今年の田に入れる水あげの間に合わない。そのうちには、どんな大事がもちあがるかもしれない。

「成瀬さんだいたいどうぶですか。」
と、きかれると、

「だいたいどうぶです。安心してください。」

と答えはしたものの、ここで博士はちよつと小首をかたむけた。



ところで、成瀬博士には、齒車に関しての特許になつてゐる理論があつた。つまり、他の人には使用することの許されない理論である。博士自身ならそれを使つてもよいのである。博士は、その理論を使つて、この齒車をなおそうと決心した。

それには、この齒車を遠い東京にまで運んでいつて、めんどうな齒切機械などにかける必要はない。博士が自分で、やすりを使つて作りなおすだけでよいのである。そこで、博士は、自分の連れてきた大学のわかい人たちをさしずして、そのやり方でなおし、あとは、その通りに見習つてやらせることにした。

「じくうけ」の焼けたところは、近くの石巻というところの鉄工場で急いで作らせることにし、自分は、そのあくる朝の四時

にまたパツカードで仙台に帰つて、その日の大学の講義を済まし、同じ大学の棚橋博士に、あとのことたのんで、そのばん、どうしても出かけなければならぬ旅行にたつた。

このポンプのすえつけられた機関場から水を送りだして、それが何里かある長い水路を通り、さらにわかれて千五百町歩の水田のすみずみまで水をいきわたらせるためには、どうしても一週間の日時がかかる。六月二十日に植えつけを終らせるためには、おそくも六月十三日に水をあげ始めなければならぬ。十三日に水をあげるためには、その九日のばんから数えて、まる三日間の日数があるだけである。一年かかるこの難事業を、三日間で完成しなければならぬのである。もしも、これが完成しなければ、水があがらない。水があがらなければ千五百町

歩の田に植えつけができない。四万石の米はとれない。それどころか、そうどうさえ起きかねない。成瀬博士に対しても合わす顔がない。

棚橋博士の心はあらゆるものを焼きつくす熱に燃えた。事務員のさしだしたお茶にさえ目をくれず、手早く作業服に着かえると、機械のあちこちを調べながら、自らあれこれとさしずをした。うす暗くなっても作業は続く。あらゆるこまかな点を一つ一つ調べ、方々の具合をなおしていた博士の顔が急に明かってくるようになった。



「さあ、できたぞ！」

「完成だ！」

博士は、力強い自信のある声でさげんだ。

博士は自らスイッチを入れた。

物すごいエンジンの音がうなった。

エンジンはうなって活動を始めた。

博士も、大学のわかい人たちも、事務所長も、組合長も、み

んな感謝の万才をさげんだ。

千五百町歩の水田は救われたのだ。四万石の米は生産されるのだ。

○

成瀬博士は、あとでこう語った。

「さて、これで一つみなさんに聞いていたただきたいことがあります。

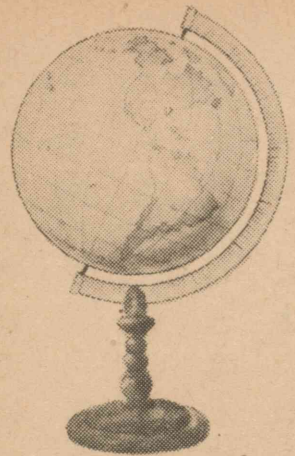
わたくしが『佐沼町ほか四つの村の人たちが、全部手にバケツをもつて北上川の水を水田にかいこんだらいいでしょう。』と申しました。ところが、『それは不可能だ。』と言われた。しかし、修理が完成して棚橋博士がスイッチ一つ入れると、たちまち水があがって四万石の米がとれるということになった。だが、いったい水をあげたのか、また、米を作るのか。わたくしではない。わたくしは、その時、明きらかに旅にでていました。あとを棚橋博士がわかい人たちとともに努力してくださいました。この人々の手によつて、水は無事にあがった。もつと正しく言えば、それは棚橋博士でもない。手伝った人

たちでもない。この人たちの持っている技術というものが、水をあげ、米のとり入れと、供出とを可能にしたのであります。技術ということと、単なる人間の力というものの比かが、みなさんにおわかりになったことと思ひます。」

北極探検のアムンゼン

地球の両極地方はどんなありさまであるうか。

たとえ人の住めない寒い寒いところであろうとも、知られない部分が地球上にまだ残っているということは、地球の主人公た



る人間にとっては、はなはだ残念なことでもあり面目ないことでもある。

ことに、両極地方の探検には、そのあらあらしい自然力にうちかつという喜びの上に、地球の回転のじくの上に立つのだという楽しみまで加わるのである。

こんなことで、多くの人々の探検の結果、現在では、両極地方のありさまも、だいたいわかり明きらかになっている。南極地方には大陸があると考えられ、山脈や雪原や氷河があり、その氷の海岸線も半ばわかつている。北極地方は海で、北氷洋と名づけられているが、その中央部の海面は、陸地と同じようである。見わたす限り、氷と雪の原野である。

この両極地方の探検に、もつとも大きな功績を残したのは、



ロアルト・アムンゼンという人である。

アムンゼンは、一八七二年にノールウエーに生まれたが、少年のころから、探検家になろうと志して、スキー術を習得したり野外生活で身体をきたえたりした。それから、なお船員となって航海術をも修めた。その後、探検旅行に加わって、いろいろな知識を得た上に、大学で海洋学や気象学や磁気学などを学んだ。こうした準備のあとで、かれはそのしょうがいを探検事業にささげた。

アムンゼンの探検の功績は、いくつもあげられる。その主なものとしては、まず北西航路を開いたことがある。この北西航

路というのは、ヨーロッパの北西の方、グリーンランドとカナダとの間の島々の中をぬけ、アラスカの海岸からベーリング海きょうを経て、東洋へ出る近道の航路をさすのである。アムンゼンは、わづか四十八トンの小さな船で、五人の同志を率いて、みごとに乗りきった。そして、この航路を開くにあたって、地球の磁気に関する尊い研究をもなすとげた。

つぎには、南極探検がある。アムンゼンは本隊を基地に残しておき、四人の同志とともに、犬とそりによって、みごと南極探検に成功した。いろいろの人によって試みられた南極へのとう達は、一九一一年十二月、かれによって初めて成功したのである。

そのつぎには、北東航路の探検がある。これは、北ヨーロッパから北氷洋をシベリヤの海岸づたいに進み、ベーリング海きょうを経て東洋に通ずる航路だ。アムンゼンは八百トンの船で同志九人を率いて進み、北氷洋の流氷の間をつつ切り、ベーリング海きょうからアラスカへとう着した。この航海を、かれは満二年余を費やしてゆつくりやったが、その間にシベリヤにそつた海岸の地理や気候や磁気などをくわしく調べた。しかし、アムンゼンが、もつとも心をかたむけたのは、さらに北極を探検することであつた。

犬とそりによる極地探検は、もう旧時代のものであつて、今後は飛行機によつてなされなければならぬというのが、多くの探検家の意見であつた。

アムンゼンも早くから同じ考えを持っていた。

一九二三年六月には、アラスカから北極へ飛行しようとして失敗したが、なおその計画をすてず、各方面を説きまわって、賛成者や力をあわせてくれる者を得て、これを決行した。

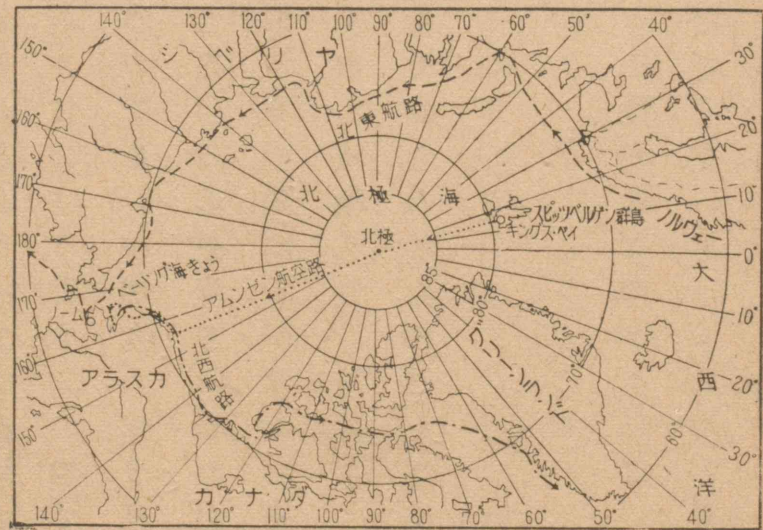
一九二五年五月二十一日、午後五時、アムンゼンの一行六名は二機の飛行機に乘組み、キングス・ベイを勇ましく飛びたった。

キングス・ベイは、ノールウエーとグリーンランドとの間の北方、スピッツベルゲン群島にある港である。

この探検は、飛行機のこしよや、ガソリンの不足などで、アムンゼンにとっては、けっして、満足とはいえなかつた。しかし、氷上生活の間に、たえず海流や気象や冰山を研究し、氷原のありさまをくわしく調査して、貴重な経験をしたのである。アムンゼンは、この貴重な経験をもとにして、次回の北極探検の計画を立てた。

飛行船での再挙

アムンゼンは、前の経験から、北氷洋の氷原は、でこぼこが



ひどく、そのさげ目の氷面はせまくて、飛行機を着ける場所がないということから、こんどは飛行船にしてみようと考えた。そこでかれは、世界各国のさまざまな飛行船について、その構造と働きを調べ始めた。

当時、イタリヤの空軍は、NI号という飛行船を持っていた。一九二四年につくられたもので、長さ百十メートル、二百五十馬力の発動機が三個ついている。アムンゼンは、これが使えたらと思つて、イタリヤ政府に相談をしてみた。そして、NI号の設計者であるイタリヤのノビレ大佐と直接会見してみると、話はうまく進み、単に北極探検だけでなく、さらにアラスカまで飛んでみようということになった。それからこの飛行は、ノールウエーとアメリカとイタリヤとの三国の協同で行うことにな

り、三国からの公私の寄付金はその費用にあてられた。

NI号はノルゲ号と命名された。

ノルゲ号は、極地を飛ぶという目的のために、いろいろ改造されたが、とくにつぎの四つの点に注意した。

- 一、不必要な重量を減らして航続力を増すこと。
- 二、低温度にたえるようにすること。
- 三、気のう、その他を強くすること。
- 四、ひとりで着陸できるようにすること。

これらの改造が終つて、ローマからキングス・ベイまで飛び、一九二六年五月七日にとう着した。

乗組員は、アムンゼンを隊長として、アメリカ側代表としてエルズワース、イタリヤ側代表としてノビレ大佐、ほかに飛行

船を運転する者四名、機関士五名、無電技師二名、助手一名、新聞記者一名、気象関係を受け持つ者一名、総員十七名、それに、ノビレ大佐の愛犬が一匹き加わっていた。

五月十日、出発の用意は、アムンゼンの細かな注意で、何一つ手落ちはないというまでにすっかり整った。

あくる朝、一行は一つのテーブルを囲んで、朝食をうんとつめこんだ。この食事が、もしかすれば地上で食べる最後のものとなるかも知れないと、さすがに異様な気持になった。しかし、飛行服に着かえると、総員、自信と勇気がみなぎってきた。

空は青く冷たく晴れわたり、朝日の光は、一面の白雪を照らしている。風は東南東から強くふいている。

「ひきづなをはなて。」

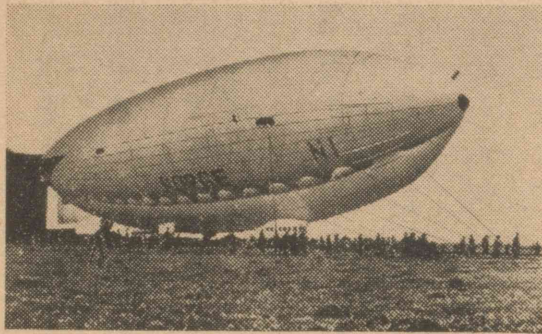
と、アムンゼンの命令一下。

一九二六年五月十一日午前八時五十分、ノルゲ号は静かに上空へのぼっていった。

このノルゲ号の飛行について、アムンゼン自身、日本の新聞に長い記事を寄せている。その大要つぎのようである。

○

さらば文明よ、
しばしの別れ。
われらはいま北極を目ざして勇ましい旅に
のぼるのだ……。



隊員はみな、この詩のような気持を味わった。地上の人々の姿は見えなくなり、キングス・ベイの町も、白くかがやく平野の中の一点にすぎなくなる。氷のように冷たい大空の静けさを破って、ノルゲ号の二個の発動機はばく音をたて始めた。「いよいよ北極横断のかどでだ。」
思わず、こうさげんだわれわれの心には、もう不安のかげさえもなかった。

われわれは、進路をミトラみさきへとり、スピッツベルゲンの西海岸にそって飛行した。青空にかかっているごくうすい雲を通してくる日光が、みねに白雪をいただいた山々をかがやかすありさまは、じつに美しく、また大きなながめであった。アムステルダム島を通過してからは、まっすぐに北極へ向かって

進んだ。

乗組員一同は、みなそれぞれたいせつな役目をもって働いている。中でも、無電係のふたりは、本当にねむるひまもなかった。

時々、乗組員のはりきった気分をゆるめたり、思わずわらわせたりのものがあった。それはノビレ大佐の愛犬で、自分も北極横断の勇者のひとりであることなどは少しも知らず、いすの上に毛布にくるまってねていた。けれども、だれもかまってくれるひまもないので、やがて、いすからとびおりてくつをくわえてふりまわしたり、あちこちへもぐりこんで鳴いたりした。
出発後一時間ばかりして、北緯八十度のスピッツベルゲンの北岸に、氷原が七、八キロメートルもつき出ているのが見えた。

その先たんを通過して、さらに数分の後には、極地の大氷原の上
にさしかかった。このはてしない大氷原の上を、ノルゲ号は
毎時八十キロメートルの速さで乗りきって行く。それは全くめ
ずらしい印象であつた。静かな青空と、寒冷な氷原と、はげし
い日光、その中空を進むのである。エンジンは時計のように規
則正しく動いている。



われわれは飛行船上から陸地を見つけよ
うとしたが、だめであつた。鳥やけものを
見つけようとしたが、それもだめであつた。
北緯八三度に達するころ、白くまやあざら
しの足あとが点々と見られたが、かれらは、
初めて聞く発動機の音をこわがってかくれ



たのだらう、その姿は見えなかつた。

北緯八十四度を過ぎるころには、もう生
物の気配も全くなかつた。見るからにおそ
ろしい氷原の上には、ただノルゲ号のかけ
だけが動いている。その大きなかけは、大
きな氷のかたまりの向こうにかくれたり、あちこちが破れたり、
また、はつきり現われたりして、おくれずについてくる。

午後九時ごろ、北緯八十七度をこえた。前年の五月二十二日、
飛行機で着氷し、氷上に生死の間をさまよつたのは、そこから
五十マイルばかり西方の地点だつた。

北緯八十八度あたりまで進むと、前方は一面にきりが立ちこ
めていた。その中に乗りこんだが、きりは濃く、少しの展望も

きかないので、六百メートルの高度にのぼり、さらに一千メートル以上の高度をとって、きりから出た。すぐ下には、もうもうとしたきりが、ひつじの毛を山と積んだようにうずまいている。われわれは、しだいに不安を感じてきた。いつしか北極のちよ
う上をも過ぎて、その向こう側の、人に知られない不思議な
ころにでも出るのではなからうか。何か、おそろしい不安の中
に二時間ほど、濃いきりの上を飛んだ。そしてこの時もおそろ
力強いたよりとなったのは、南ノールウェーからきた気象報告
であった。

「少なくともアラスカのノームまでの航空は追い風であろう。」
無電技師がそういう通信を受けるごとに、一同はよみがえった
思いで、あらたな希望をいだいたのであった。

ノルゲ号は、まっしぐらに北極へとつき進んで行く。いつし
か北緯八十九度の地点も過ぎた。進むにつれてきりはうすらぎ、
十二日午前一時ごろは、たちこめたきりは全く後方に去ってし
まった。ただうすく、やわらかい雲のかたまりが、点々と空に
ただよっているだけである。その雲に、太陽の光が、かがやか
しくさしている。おお、そこが目ざす北極なのだ。

北極！ 北極！

五月十二日午前一時三十分、ついに、あこがれの北極のちよ
う点に達したのだ。

「北極点にとう達したぞ。」

隊員一同、どっと歓声をあげた。

ノルゲ号は、北極の真上を、静かに百メートル以下の高さに

くだった。すでに、ゆうかな人々が、あらゆるこん難とたたかかってとう達しようとした大目標が、まのあたりにながめられるのだ。ゆめでもない。まぼろしでもない。隊員のうち、だれもことばを発するものはなく、ただ、喜びと、おどろきでむねが一ぱいである。

やがて、われわれは、われに返って、ささやかな式をあげた。船室の小さいまどをあけ、一同はぼうしをとって静かに目と目とじ感謝した。続いて、自分（アムンゼン）

はノールウエーの国旗を、エルズワース君はアメリカの国旗を、ノビレ大佐はイタリヤの国旗を投下した。隊員一同はしばしま

たもくとうをささげた。

ノルゲ号は、静かに北極点の上を二回まわった。

われわれは、さらにあらたな進行方向を考えた。

われわれが今まで飛んできた場所は、だいたい人に知られていないところだ。北極とアラスカとの間こそは、まだだれひとり見たことのないなぞの世界である。われわれにはまだ空路が残っている。われわれは、そこを確実に探検して、人類の知識を広めるためにつくさなければならぬ。

太陽は大氷原の上を照らしている。空は青く、雲はうすい。

隊員一同は、たがいにかたく手をにぎりあつた。ノルゲ号はふたたび空高くまいあがった。エンジンの音は勇ましくひびき



始めた。

ノルゲ号は、キングス・ベイ出発以来、初めて船首を南へ向けた。アラスカの最北たん、バロームさきをさして進んだのだ。無電通信と気象状態とは、探検隊にとつてもつとも重要なものである。この二つが、はなはだ良好だったので、大きな心配のたねは空路に何もなかった。美しい空にきれいな雲が見える。大気は静かで、風はない。ノルゲ号は四百メートルの高度をとつて、毎時八十キロメートルの速度で飛ぶ。

十二日の朝、隊員中の数名は、飛行船のせまいろうかに横たわつて、少しねむろうとした。出発以来、一すいもせず働き続けて、ひどくつかれた身も、こおりつくような寒さと、エンジンのひびきとで、どんなにあせつてもねむれなかった。

十二日の午前七時ごろ、氷の北極を通過した。北緯八十八度、西経百八十七度の所が、氷の北極とよばれている。

氷の北極を通過した後、思いがけないきけんにであつた。前の深いきりの中につつこんでしまった。無電はきかなくなり、気象報告も得られなくなった。外部との通信が絶望となると、なきたいほどの不安を感じた。そこで、何をおいても修理しようとなつた。原因は、一つは空中電気のためであり、他の一つはノルゲ号からさがっているアンテナに、はつた氷のためである。ノルゲ号は、八百メートルの高度をとつた。こん難は一時間ごとに増してきた。夕方になると、頭上には、みつ雲が厚く重なり、足もとには深いきりがうずまいていく。高く飛ぶべきか低く飛ぶべきか、第一にそれから決定しなければならぬ。

まず低く飛んでみたが、下方では雪が降りしきっている。今度は高く飛んでみた。今度はあらたなきけんに当面した。北極飛行でもっとも心配していた、大きなガス気の中の表面に氷がはってしまった。ついには、プロペラや発動機に氷がついた。その氷が、回転するプロペラのために、氷のかけらとなって、船体のズックに、はげしい勢いでぶつかり、あちらこちらにあなをあげる音が聞こえてきた。こんななきけんが起こりかけた時、われわれはアラスカの北海岸から三百キロメートルほどはなれたところを飛んでいた。

われわれは、氷のかけらがノルゲ号にどんなわざわいをおよぼすかを注意深く見まもった。いくたびか、発動機をかわるがわる休ませたり、プロペラにくつついた氷を取り除いた。そして、難航を続けながら、バロームさきを求めて飛んだ。

五月十三日の朝、氷原の状態から見て、いよいよ陸地も近いことがわかった。氷のさけ目は、その数を増し、ついに海を見た。

午前六時五十分、南方の水平線を望遠鏡で見ていたものがとつぜんさげんだ。

「船首に陸地が見える。」

一同はむねをおどらせながら、その方向を見つめた。白い雪の中に、大きな岩が黒い線となってあらわれているのが見てとられた。

午前七時五十分、ついに海岸上空に達した。目的のバロームさきである。われわれはそこに着陸しようとした。たちこめた

きりのために、展望は少しもきかない。もしこのまま前進したら、けわしいアラスカの山にぶつかって、あわれな最後をとげるかも知れない。やむなくアラスカの海岸にそってベーリング海きょうへ航路をとった。しかし、たちこめたきりと、気のうに凍りつく氷によつて、船体が絶えず下方へおしつけられる。その上、はげしいふぶきにおそわれて、ノーム行きは思いきり、その手前のテラー村に着陸しなければならなかった。

五月十四日、午前八時、テラー村に着陸した。キングス・ベイを出発してからここまで、七十一時間、四千百キロメートルの長い航空の後、初めて大地に足をつけたのだ。われわれはその大地の上にすわりこんでしまいたい気持だった。

着陸後一時間とたたないうちに、ノルゲ号の気のは破れてしまったが、アムンゼンの大きな志は、ついにやりとげられたのである。

ことばの表

○アーネスト	四 いえじ	亮 うなだれて(うなだれる)	七 おしょう(さん)	六
あいけん	二 いがい	一六 うわさ	一六 おぼれて(おぼれる)	一八
あきたらす	九 いかめしさ	三三 うんえい	一六 おり	二四
あくた	二二 いしのまき	六六 うんてん	六二 ○かいがんせん	七四
あざらし	六六 いす	二四 うんめい	六四 かいけん	八〇
あしかが	五 いっか	八三 ○Nいちごう	八〇 かいぞう	八一
あしもと	三三 いっこう	六二 エルズワース	八一 かいてん	八四
あじわい(あじわう)	二二 いっさい	四〇 ○オーバー	一五 かいようがく	四一
あせつて(あせる)	三三 いっすい	九二 おいかぜ	六六 かいりゅう	四四
アムンゼン	三三 いとしご	二二 おうだん	六四 かき	三三
あらあらしい	七四 いとなんで(いとなむ)	三六 おおきなる	二五 かくじつ	九一
アラスカ	六 いななみち	三三 おおしま	二四 がくそ	三三
あらゆる	三七 いよう	六二 おかやまけん	五 かと	三六
あわれ(な)	六 いわお	四四 おきょう	六 がじん	五
アンテナ	三三 いんしょう	二五 おくそこ	三三 ガソリン	九
○いいつたえ	四四 ○うせて(うせる)	二〇 おこたつて(おこたる)	六 かだい	三六

がっこうとしょかん	三 きかんし	二二 きよじん	四 ぐんしゅう	五〇
かどで	八 きかんば	六 ぎよつ(と)	六 ○けいさいぶちよう	九
かどべ	五 きぎく	二六 きよめられる(きよめる)	三 けしつ	三六
かなえられた(かなえる)	九 ききめ	七 きわめよう(きわめる)	三 けしつぶ	三三
かながわけん	二七 きじゅうき	三 きんかく	五 けっこう	六
カナダ	六 きたい	四 ぎんかく	五 けり	二四
かなづかい	四 きたかみがわ	三 キングス・ベイ	六 げんかく	四
かねない	七 きたり(くる)	二四 ○ぐあい	七 げんば	六〇
かねる	四 きち	六 けんちようじ	八 げんちようじ	八
かのう	三 きちよう	九 けんや	九 げんや	七
かまくら	八 きぬ	二六 かせ	六 ○こ	八〇
かも	二 きのう	八 ちずさんで(ちずさむ)	三 こうがく	四〇
かもつ	六 きひん	二六 ちずさんで(ちずさむ)	三 こうがく	四〇
かるんずる	三 きほう	二五 くびすじ	五 こうぎ	九
かんげい	四 きやく	三 くみあいちよう	七 こうこくし	二二
かんしん	四 きようくん	五 くら	四 こうし	八一
かんせい	六 きようしゅつ	三 くらべて(くらべる)	二 とうせき	七四
がんべき	三 ぎょうせき	七 グリーンランド	六 とうぞくりよく	八一
かんれい	六 きょうち	二 (めを)くれる	古 とうど	八六
○きか	五 きょくち	七 クローディアス	九 ーこく	八四

すんぽう	空 せんいん	空 たなはしはくし	空 つかつか(と)	空
○せいし	空 ○そうき	空 たねん	空 つちくれ	空
せいじか	空 そうぞう	空 ためらつて(ためらう)	空 つつしみ	空
せいじつ	空 そうどう	空 たんけん	空 つぼんだ(つぼむ)	空
せいたく	空 そしき	空 ○ちじ	空 ○ていぼろ	空
せいとう	空 そつきょうてき	空 ちしつてき	空 ておち	空
せいふ	空 そばく	空 ちぢれた(ちぢれる)	空 てがけた(てがける)	空
せいぶつ	空 そんざい	空 ちつじょ	空 てこぼこ	空
せきにんしゃ	空 ○たいいん	空 ちてん	空 だし	空
セザンヌ	空 だいざい	空 ちまなこ	空 でっかい	空
せっかん	空 たいせい	空 ちやくしゆ	空 てつがく	空
せつげん	空 だいたい	空 ちやくすい	空 てっこうば	空
せつしゆ	空 だいち	空 ちやくくりく	空 てはい	空
せつない	空 たいちよう	空 ちやみせ	空 テラーむら	空
せつぼう	空 たいど	空 ちゆうおうぶ	空 てんさい	空
ぜんご	空 たいよう	空 ちようてん	空 でんち	空
ぜんしゆ	空 たいりく	空 ちようぶ	空 てんねん(に)	空
ぜんそう	空 たえず	空 ちり	空 てんぼろ	空
せんたい	空 たたえて(たたえる)	空 ○ついやして(ついやす)	空 ○ドア	空
ぜんりよく	空 だだ(をこねる)	空 つうか	空 といし	空

さぬま	空 じむいん	空 しょか	空 すんこく	空
ささやか(な)	空 しばし	空 じょうたい	空 スピッツベルゲン	空
さどう	空 じびき	空 じょうようしゃ	空 スピッツベルゲン	空
さいほくたん	空 じどう	空 しょうがい	空 すじょう	空
さいほうふく	空 しどうしゃ	空 しょうけい	空 ずつう	空
さけめ	空 じない	空 しょうこくじ	空 ずック	空
ささやか(な)	空 しばし	空 じょうたい	空 スピッツベルゲン	空
さどう	空 じびき	空 じょうようしゃ	空 スピッツベルゲン	空
さぬま	空 じむいん	空 しょか	空 すんこく	空
こくさん	空 さんみやく	空 じむちよう	空 じょしゆ	空
こくび	空 ○じあまり	空 しゃいかかがく	空 じよせつ	空
こくみん	空 じかい	空 シューベルト	空 しらぎく	空
こしょう	空 じき	空 じゆうが	空 しらゆき	空
こしらえもの	空 じきがく	空 しゆうきよう	空 シリーズ	空
ごせんし	空 じきつて(じきる)	空 しゆうとく	空 しろくま	空
ゴッホ	空 しきふ	空 しゆうぶん	空 しんじつ	空
ことなつた(ことなる)	空 しきゆう	空 しゆうよう	空 はんぞう	空
こぼろす	空 じくうけ	空 じゆうりよう	空 しんろ	空
こぶし	空 しくしく	空 しぎよう	空 (に)スイッチ	空
こもりうた	空 しぜんかがく	空 しゆんこく	空 すいでん	空
こんざつ	空 しぜんりよく	空 じゆつ	空 すがれて(すがれる)	空
こんなん	空 しだいに	空 じゆんかつゆ	空 (に)すぎなく(すぎない)	空
○さいきよ	空 じつそう	空 しょうがい	空 すじょう	空
さいほくたん	空 じどう	空 しょうぐん	空 ずつう	空
さいほうふく	空 しどうしゃ	空 しょうけい	空 ずック	空
さけめ	空 じない	空 しょうこくじ	空 すばりと	空
ささやか(な)	空 しばし	空 じょうたい	空 スピッツベルゲン	空
さどう	空 じびき	空 じょうようしゃ	空 スピッツベルゲン	空
さぬま	空 じむいん	空 しょか	空 すんこく	空

とうか…………… 五 かにしび…………… 四 はんしや…………… 二
 とうか…………… 五 にちじ…………… 五 はんめん…………… 三
 とうなんとう…………… 五 にっぽんじしん…………… 四 ○ひあがつて(ひあがる)…………… 五
 とうほくだいがく…………… 五 ぶんるいひよう…………… 四 ピアノ…………… 六
 とうめん…………… 五 ぶんじょう…………… 三 ひきづな…………… 三
 とうよう…………… 五 ノーム…………… 六 ひこう…………… 七
 としよせん…………… 四 ノールウェー…………… 五 ひこうせん…………… 七
 とつきよ…………… 六 ノック…………… 五 ひさし(き)…………… 四
 とつさ(に)…………… 六 ノビレたいさ…………… 六 びしと…………… 三
 とも…………… 三 ○はがた…………… 五 ひつじ…………… 六
 ととのつた(ととのう)…………… 六 はきりき…………… 七 ひときわ…………… 四
 とみ…………… 五 ばくおん…………… 四 ひとけ…………… 六
 ○なかぞら…………… 六 はぐるま…………… 五 ひひょうかい…………… 四
 なだらか…………… 五 バックカード…………… 五 ひもじさ…………… 五
 なないろ…………… 三 はつせい…………… 五 ひよう…………… 六
 なまぐさい…………… 三 はつどうき…………… 六 ひようげん…………… 六
 なるせはくし…………… 五 はなむけ…………… 二 ひようめん…………… 六
 なんこう…………… 五 ばりき…………… 六 ○ふうりゆう…………… 五
 なんじぎょう…………… 五 はるはる…………… 五 フェルディナンド…………… 六
 にかよった(にかよう)…………… 六 パローみさき…………… 五 ふそく…………… 九
 ポンプ…………… 五 みやぎけんちょう…………… 五 ゆうしや…………… 五
 ○まいあがつた(まいあがる)…………… 五 ぶん…………… 五 ゆうもや…………… 五
 あがる…………… 五 ○むさくるしい…………… 三 ゆうゆうと…………… 四
 まいくるう…………… 五 むせび(むせぶ)…………… 六 ゆそう…………… 六
 まいじ…………… 六 むでんがかり…………… 五 けい…………… 五
 ーマイル…………… 七 むでんぎし…………… 六 ーよく…………… 三
 ましろ(なる)…………… 四 むろん…………… 五 よげん…………… 五
 まっかい…………… 三 ○めいが…………… 二 よこたわつて(よこたわる)…………… 五
 まつがえ…………… 三 めいめい…………… 九 よしみつ…………… 五
 まっしぐら…………… 九 めいれい…………… 八 よしもち…………… 五
 まのあたり…………… 五 メロディー…………… 四 よそゆき…………… 二
 ○みあわせた(みあわせる)…………… 六 もくとう…………… 九 よみがえつて(よみがえる)…………… 六
 みうらぐん…………… 七 もぐりこんで(もぐりこむ)…………… 三 りくすいがく…………… 四
 ミケランジェロ…………… 二 もりこんで(もりこむ)…………… 三 りくすいがく…………… 四
 みさきむら…………… 七 ○ーや…………… 二 りゆうすい…………… 七
 みじめ(な)…………… 四 やき…………… 七 りゆうきよく…………… 三
 みたしたい(みたす)…………… 五 やけただれた(やけた)…………… 六 りようこう…………… 三
 みつらん…………… 五 だれる)…………… 三 りようしん…………… 三
 みならつて(みならう)…………… 六 やりっぱなし…………… 六 りろん…………… 六
 みはつて(みはる)…………… 六 ○ゆうかんな…………… 五 ○レオナルド・ダ・ビンチ…………… 二

とうか…………… 五 かにしび…………… 四 はんしや…………… 二
 とうか…………… 五 にちじ…………… 五 はんめん…………… 三
 とうなんとう…………… 五 にっぽんじしん…………… 四 ○ひあがつて(ひあがる)…………… 五
 とうほくだいがく…………… 五 ぶんるいひよう…………… 四 ピアノ…………… 六
 とうめん…………… 五 ぶんじょう…………… 三 ひきづな…………… 三
 とうよう…………… 五 ノーム…………… 六 ひこう…………… 七
 としよせん…………… 四 ノールウェー…………… 五 ひこうせん…………… 七
 とつきよ…………… 六 ノック…………… 五 ひさし(き)…………… 四
 とつさ(に)…………… 六 ノビレたいさ…………… 六 びしと…………… 三
 とも…………… 三 ○はがた…………… 五 ひつじ…………… 六
 ととのつた(ととのう)…………… 六 はきりき…………… 七 ひときわ…………… 四
 とみ…………… 五 ばくおん…………… 四 ひとけ…………… 六
 ○なかぞら…………… 六 はぐるま…………… 五 ひひょうかい…………… 四
 なだらか…………… 五 バックカード…………… 五 ひもじさ…………… 五
 なないろ…………… 三 はつせい…………… 五 ひよう…………… 六
 なまぐさい…………… 三 はつどうき…………… 六 ひようげん…………… 六
 なるせはくし…………… 五 はなむけ…………… 二 ひようめん…………… 六
 なんこう…………… 五 ばりき…………… 六 ○ふうりゆう…………… 五
 なんじぎょう…………… 五 はるはる…………… 五 フェルディナンド…………… 六
 にかよった(にかよう)…………… 六 パローみさき…………… 五 ふそく…………… 九
 ポンプ…………… 五 みやぎけんちょう…………… 五 ゆうしや…………… 五
 ○まいあがつた(まいあがる)…………… 五 ぶん…………… 五 ゆうもや…………… 五
 あがる…………… 五 ○むさくるしい…………… 三 ゆうゆうと…………… 四
 まいくるう…………… 五 むせび(むせぶ)…………… 六 ゆそう…………… 六
 まいじ…………… 六 むでんがかり…………… 五 けい…………… 五
 ーマイル…………… 七 むでんぎし…………… 六 ーよく…………… 三
 ましろ(なる)…………… 四 むろん…………… 五 よげん…………… 五
 まっかい…………… 三 ○めいが…………… 二 よこたわつて(よこたわる)…………… 五
 まつがえ…………… 三 めいめい…………… 九 よしみつ…………… 五
 まっしぐら…………… 九 めいれい…………… 八 よしもち…………… 五
 まのあたり…………… 五 メロディー…………… 四 よそゆき…………… 二
 ○みあわせた(みあわせる)…………… 六 もくとう…………… 九 よみがえつて(よみがえる)…………… 六
 みうらぐん…………… 七 もぐりこんで(もぐりこむ)…………… 三 りくすいがく…………… 四
 ミケランジェロ…………… 二 もりこんで(もりこむ)…………… 三 りくすいがく…………… 四
 みさきむら…………… 七 ○ーや…………… 二 りゆうすい…………… 七
 みじめ(な)…………… 四 やき…………… 七 りゆうきよく…………… 三
 みたしたい(みたす)…………… 五 やけただれた(やけた)…………… 六 りようこう…………… 三
 みつらん…………… 五 だれる)…………… 三 りようしん…………… 三
 みならつて(みならう)…………… 六 やりっぱなし…………… 六 りろん…………… 六
 みはつて(みはる)…………… 六 ○ゆうかんな…………… 五 ○レオナルド・ダ・ビンチ…………… 二

文庫

50

9750

広島大学図書

0130449750

